

2018年11月30日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 28

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

1793年に中国を訪れたマカートニー使節団は、同年5月に航路の途中でプロ・コンドール島（5月16日）やダナン（5月25日）に寄港している。マカートニー使節団の事務長であったジョージ・スタントンが残した報告書の中にこの沿岸航路とパラセルの関係に関する下記のような記述が見られる。

Pulo Canton, named, also, Pulo Ratan, whose extremities being high and its middle low, give it the appearance of two islands, was descried on the twenty second of May. The squadron was now abreast of the kingdom of Cochin-china, and their passage between its shores and a multitudinous range of rocks and islets, called the Paracels, lying north and south for almost four hundred miles. The danger of being driven against these, by currents, was not less to be attended to than what are called, in those seas, typhoons, in the Atlantic, hurricanes; being both alike as to the violence and sudden shifts of the wind.
[Satunton 1797: 152-153]

南北400マイルに渡って広がっているという記述はまさに「想像のパラセル」のことを指している。別の箇所添付された *A Map of China with the Track of the Lion & Route of the Embassy* という地図からもそのことを確認できる。その地図には *Pracel* と記されているが、このパラセルは縦長の囲みの中に抽象的な+記号とやや具象的な島影が混在しているタイプの描き方がされている。さらにその東北方に抽象的な *Spectacles* が描かれている。北京に向かう往路は、インドシナ半島東部の沿岸航路である所謂 *inner passage* が使われているのに対して、北京からの復路ではパラセルの東側を通る *outer passage* を使用したことが記されている。

19世紀初頭に現実のパラセル諸島に関する情報が普及する以前の段階のヨーロッパ人航海者による「想像のパラセル」認識の最終的な局面を示すものといえよう。

Satunton, George. 1797. *An historical account of the embassy to the Emperor of China undertaken by order of the King of Great Britain*. London : printed for John Stockdale
[Eighteenth Century Collections Online (ECCO)]